

海を越えた肥前の陶磁

Hizen Porcelain that Traveled Abroad

大橋康二

はじめに

①磁器の主な生産地

②東南アジアにおける主要な発掘調査

③東南アジアに流通した肥前陶磁の特徴

④17世紀以降の東南アジアにおける磁器流通の特徴

まとめ

【論文要旨】

江戸初期、日本で最初の磁器焼成に成功した肥前は、1640年代から本格的な海外輸出を開始する。1610年代頃に佐賀県有田周辺で磁器生産が始まり、急速に肥前各地に広まる。それまで我が国では磁器ができず、主に中国から輸入していた。肥前磁器が誕生してもなお、中国磁器が輸入されていたが、1644年、明清の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の海外輸出が激減する。その結果、肥前磁器は国内の磁器市場を独占し、そればかりか、それまで中国磁器を買っていた東南アジアから西アジア、ヨーロッパに至る地域にも輸出する。日本は鎖国に入っていたが、肥前磁器は1647年、早くも中国船によって輸出され始める。1650年代になるとオランダ東インド会社も肥前磁器をインドネシアのバタヴィアに運び始め、1659年から大量注文により、インド、西アジアからヨーロッパにまで輸出する。海外輸出された肥前磁器の流通範囲と内容は時代、地域によって異なる。東南アジアにおけるその特徴をまとめてみると、

- ・東南アジアへの肥前磁器輸出は1650年代から1670年代にピークがある。
- ・インドネシアだけはオランダの東洋貿易の根拠地があったため、18世紀に入っても引き続き肥前磁器が流通する。しかしその内容はヨーロッパ向けの磁器と同じになる。
- ・17世紀の肥前磁器食器はインドネシアでは大皿が多いのが特徴としてあげられ、タイでは碗が主、ベトナムでは碗・小皿が主である。これはそれぞれの地域の食習慣の違いが原因と考えられる。

このように一時期、中国磁器に代わって海外輸出された肥前磁器は、1684年の清の展海令で中国磁器の本格的輸出が再開されると、東南アジアの磁器市場から駆逐された。